

原景の庭



様式 9

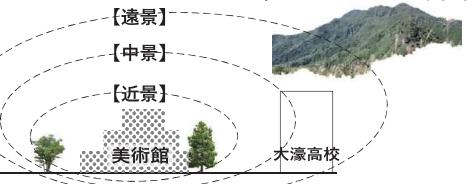
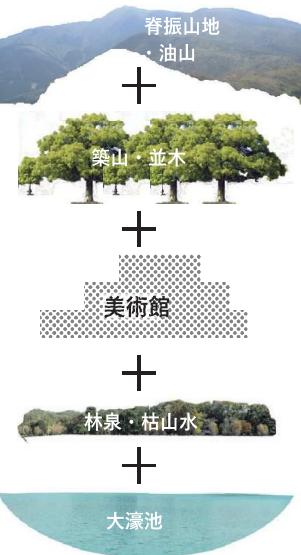
受付番号

14

SPACE 主題 2_県民が親しみ、誇りを育む美術館

1. 大濠公園と歴史を継承しながら景観を醸成する 【遠景】

日本庭園は、北側に枯山水、林泉を経て南側をクスノキを中心とした築山、という配置になっており、このことは博多湾を大濠池とし、順に海岸から平野、丘陵を経て、さらに脊振山地へと見立った風景の構造を持っていると捉えます。そして大濠池から敷地方面を臨むと、市美術館も含めて園路、緑地、建物、さらに高木の生い茂る緑地、となって市街地の高層建築群を隠す配慮がされてることがわかります。新しい県立美術館では、これをレイヤー構成として理解し整理しなおすことで、公園各所からの木々や建物までの視点の距離と高さが作り出すシークエンスを組み立て、ランドスケープをつくることと建築をつくることを同時に設計します。

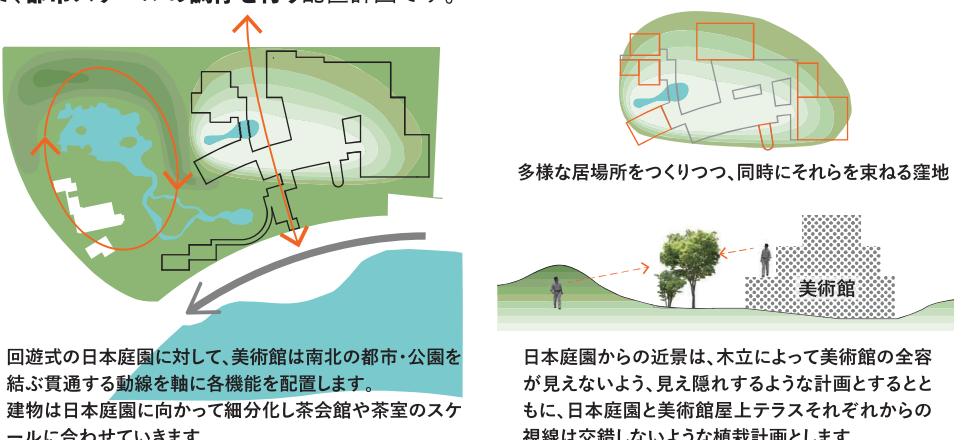


大濠池からの風景は、公園の園路沿いの緑に美術館が見え隠れする近景、日本庭園の築山や福岡城・鴻臚館のあった台地へ連なる斜面林などを含む、池外周の緑による中景、そして福岡平野を囲む丘陵とその奥に連なる脊振山地による遠景、という断面構成をとります。

SPACE 主題 1_公園と一体となった美術館【ランドスケープ、ゾーニング】

2. 県立美術館としての使命と多様なスペース【中景】

日本庭園が博多の縮景であるならば、美術館敷地はもともと入り江に面した湿地であったところのウェットさを潜在的な自然環境として重ね合わせた原景の庭として考えます。近年賑わいのある美術館南側の六本松エリアからは、スロープ広場の緩い勾配に沿って引き込まれるようにアプローチし(A)、一方大濠公園からは日本庭園北側をブリッジする大きな風除室が入り口となって(C)、南北の異なる賑わいからのアプローチがエントランス・ロビーで出会うことになります(B)。また西側に堅牢な展示室・収蔵庫・機械室ゾーンを寄せ、東側は次第にボリュームが分散し細分化しながら庭園と混ざりあうような雁行配置を持ちます。このように、隣接する日本庭園の風景に場所ごとに小さな応答をしつつ、回遊式の日本庭園に対して南北に貫通する動線を持つことで、都市スケールの調停を行う配置計画です。

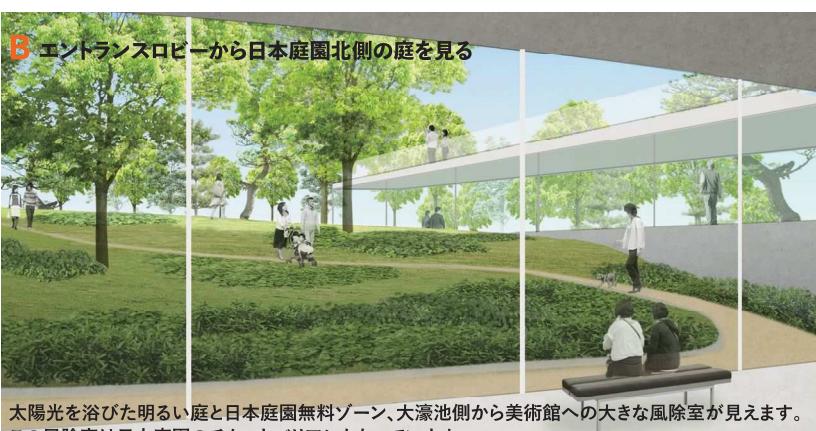


3. 駐行配置と小さな場所をつなぐシークエンス 【近景】

PLACE 主題 1_公園と一体となった美術館【ランドスケープ、ゾーニング】

県立美術館には、郷土美術の収集と研究や県民活動の発展、教育普及、アジア地域との交流や新たな芸術表現の可能性を探るなど、他施設には類を見ない、多岐にわたる使命があり、このような「満遍なく」県下を見渡す必要があるような美術館では、館の運営上の特色を打ち出していくのは難しい侧面がある一方で、それはさまざまな企画や活動が行われる多様な場所を必要とするということでもあります。

したがって、新しい美術館は従来のような大きく堂々とした美術館であるよりも、むしろもっと小さな場所に分節され、ランドスケープと溶けあうような美術館像がふさわしいと考えます。そこで場所ごとのシークエンスを紡ぎながら、小さなシークエンスの集積として全体が出来上がるような計画手法を採ります。それによって、県立美術館に求められる多様な空間をひとつひとつ実現していきます。



国体道路から緩やかなスロープに導かれるようにエントランスロビーに向かい、その後には太陽に照らされた日本庭園北側の庭が透けて見えます。

太陽光を浴びた明るい庭と日本庭園無料ゾーン、大濠池側から美術館への大きな風除室が見えます。この風除室は日本庭園のチケットバリヤにもなっています。

公園の園路に面した大きな風除室(日本庭園のチケットバリヤ兼)から美術館へ入ることができます。大濠池に対して低く伸びやかなボリュームが配置されます。

2階ロビーからは、市美術館や日本庭園へ伸びるレストラン棟、公園と日本庭園の園路を行き交う人々が見えます。茶室橋を含む大濠池を望む大パノラマが広がります。